

平和を創るのはだれか：人道主義的介入の限界

講師：栗本英世

大阪大学大学院人間科学研究科・教授

■要旨：

冷戦後の世界では、内戦中の国や地域に国連と国際社会が積極的に介入するようになってきている。内戦が終結すると、介入は一層拡大し、国家と社会の復興・再建の全域におよぶことになる。こうした、武力行使も含む「人道的介入」の対象となっている国や地域は、東チモール、旧ユーゴスラビア、ソマリア、ルワンダ、リベリア、シエラレオネなど多数ある。平和構築という概念は、内戦終結後の介入の具体的なあり方を意味する。イラクとアフガニスタンに対する介入も、厳密には人道的介入ではないが、既存の政権を武力で打倒したあとの復興・再建プログラムのあり方は、平和構築と同様である。この世界的な傾向は、人道主義とネオリベラリズムとの結合のうえに成り立っている。

本発表における基本的な問いは、人道的介入が、平和の創造、構築および定着にほんとうに貢献しているのかということである。本発表では、貢献していない側面にとくに注目し、それはいったいなぜかを批判的に検討したい。要点は、介入する側と介入される側の非対称的な権力関係、介入する側の道徳的優位性、介入される側の固有の政治・社会的特性の無視、国家と社会の乖離などである。

■講師紹介：

栗本英世（くりもとえいせい）大阪大学大学院人間科学研究科教授。専門は社会人類学、アフリカ民族誌学。スーダンやエチオピアで、民族紛争、内戦、難民、平和構築などをテーマにフィールドワーク。日本政府が派遣したスーダン総選挙監視団（2010年4月）と南部スーダン住民投票監視団（2011年1月）に団員として参加。国際NGOによる南部スーダン平和構築事業の現地調査に基づく外部評価の経験もある。おもな業績に『民族紛争を生きる人びと』（世界思想社、1996年）、Conflict, Age & Power in North East Africa（共編著、James Currey, 1998）など。最近の論文に以下がある。栗本英世（2011）「コミュニティから平和を創る——南部スーダンの現場から」藤原帰一・大芝亮・山田哲也編『平和構築・入門』有斐閣；（2011）「内戦下で人びとはなにを食べていたのか——南部スーダンにおける生業、市場、人道援助」松井健・名和克郎・野林厚志編『グローバル化と生きる世界』昭和堂；（2012）「新国家建設とコンフリクト——南スーダン共和国のゆくえ」富山一郎・田沼幸子編『コンフリクトから問う——その方法論的検討』大阪大学出版会。

日時：2012年3月16日（金）16:00～18:00

会場：大阪大学大学院人間科学研究科東館1階106講義室（参加無料）

東館は万博外周道路側の別館です。大阪大学大学院人間科学研究科（吹田キャンパス）への交通アクセスは <http://www.hus.osaka-u.ac.jp> をご参照ください。

お問い合わせ先：

大阪大学大学院人間科学研究科内 グローバル COE 事務局

TEL: 06-6879-4046

e-mail: gcoejimu@hus.osaka-u.ac.jp

